

# 『真面目が肝心』における「アーネスト」の意味

河 口 和 子

## I

『真面目が肝心』(*The Importance of Being Earnest*, 1985) は、ワイルドの代表作であり、彼の劇作の才能を十分に発揮した作品であると言える。“It is delightful to see, it sends wave after wave of laughter curling and forming round the theatre.” (Beckson 189) と William Archer が述べているのは、この劇の初演当時の大盛況ぶりをうかがわせるものである。しかし、中には以前の偉作の模倣であると攻撃する者もいた<sup>1</sup>。また、この作品があまりにも滑稽であるということと、そのプロットが単純であることから、当時の批評家の中には、“It is a pure farce of Gilbertian parentage” (Beckson 188) と述べた者もあった。『真面目が肝心』をファースに位置づけている者もいたし、Katharine Worth はこの劇を “a philosophical farce, an existential farce” (Worth 153) と呼んでいる。しかし、ワイルドは George Alexander への手紙の中で次のように述べている。

My play, though the dialogue is sheer comedy, and the best I have ever written, is of course in idea farcical: it could not be made part of a repertoire of serious or classical pieces, except for fun - once -. (Tydeman 40)

ワイルドはこの劇のプロットの単純さ、ファース的な思想については、認めているものの、彼特有のウィットやエピソードをもちこんだ会話をワイルドは重視をしているのである。この作品においては、プロットの重要性よりもワイルドの才気あるウィットに富んだ台詞を分析することにより、ワイルドの意図が見えてくるのではないのか。

また、『真面目が肝心』は彼の喜劇四作品中、状況設定や時代背景等が共通しているものの、作品傾向の違いから、前三作と分けて考えられるべきであろう。前三作品においては明確に登場人物がカテゴリー別に分類されており、ダンディーと俗物的人物、またはピューリタンの思想をもつ人物と比較対照させながら、話が進行して行く。それに対して『真面目が肝心』は二組のカップルが「アーネスト」という名前をめぐって相互作用しながらストーリーが展開する。

ワイルドはまた、‘the punning title’s meaning’ (Hart-Davis 126) と述べているように、この ‘The Importance of Being Earnest’ という題には二重の意味が含まれている。「真面目な」という意味とファーストネームの「アーネスト」であるが、この作品において男性の用いる「アーネスト」と女性の求める「アーネスト」では大きな差異があることが浮き彫りにされる。「アーネスト」にはどのような意味が内在しているのか。そして、男性が女性に求婚する折には「アーネスト」のもっている意味がどのように変貌をとげるのか。本論では「アーネスト」の意味と役割をワイルド流のウィットに富んだ台詞を分析しながら考察したい。

II

ワイルドの作品には、しばしばダンディーが登場する。ダンディーとは、ビクトリア社会のモラルに反抗し、美を追求する人々のことを言うが、この作品の中にも、ダンディー的資質を持った男性が出てくる。彼らは、結婚についてどのように考えているのであろうか、また、彼らにとって「アーネスト」とはいったい何であるのか。まずそれらの事を明らかにするために、男性ダンディーについて見てみよう。アルジャノンはワイルド自身を体現したような魅力あるダンディーに描かれている。ジャックが遊びに上京した折に、アルジャノンの家を訪問し、グウェンドレンに求婚することを告げると、アルジャノンは “I thought you had come up for pleasure?... I call that business” (169) と述べ、恋愛と結婚の違いを指摘する。恋をするのはロマンチックではあるが結婚となるとロマンチックなところは何もないのである。彼は幸せな結婚は俗物によって作り上げられた道徳にすぎない、そしてその美德を遵守することは偽善にすぎないと考える。アルジャノンはウィットに富んだ台詞をとばしダンディーぶりを発揮している。

ジャックはアルジャノンのペースにすっかりとはまってしまう。ジャックの忘れていったシガレットケースをアルジャノンは取り出し、そこに書いてある “From little Cecily, with her fondest love to her dear Uncle Jack” (175) という文字から、ジャックという名前やセシリーという女性の正体をジャックから聞き出すことに成功している。ジャックは、田舎でセシリーという女性の後見人になっており、田舎ではジャック、都会に出てくるとアーネストと名前を使い分けていることがわかる。ジャックは後見人の立場を次のように述べている。

When one is placed in the position of guardian, one has to adopt a very high moral tone on all subjects. It's one's duty to do so. And as a high moral tone can hardly be said to conduce very much to either one's health or one's happiness. (178-179)

ジャックは、後見人という俗物によって作り上げられたイメージを、田舎では几帳面に守っている。ジャックもそのイメージを維持させるだけならば偽善にすぎず、俗物的な人物になってしまう。そこで彼は、息抜きをするため上京する口実として、アーネストという名前の不良の弟をつくり上げたのだ。アルジャノンは、これをバンベリー主義者と呼ぶ。彼もまた、同時に、バンベリーという名前の万年病人の友達をつくり上げ、俗物で満たされた世界からいつでも好きな時に田舎へ抜け出せるようにしていた。『オズカーワイルド事典』によると、バンベリズムは、ダンディズムを意識した上で造られた語でヴィクトリアニズムの美德と価値観の批判主義にあたる。ワイルドがヴィクトリア時代にもっとも嫌悪された反道徳、不真面目、義務観念の欠如、不健康、享楽思想、二重生活の楽しみなどの観念をバンベリズムという語に託したのである。(山田 300) 結局二人ともダンディー的生活を満たすために、架空の人物を作り上げ、都会と田舎の二重生活をしていたのだ。Kerry Powellはこの二重性を次のように指摘する。

An Algernon Moncrieff or Arthur Hummingtop becomes a comic Dorian, fashioning an alternative identity – a “double” within whose robes he can transgress accepted standards and satisfy desires which authority would restrain. (Powell 131)

彼らが二重生活を送っているところに、彼らの葛藤が表れている。一方で社会が彼らに“high moral tone”を強いており、もう一方で、彼らはその世界から脱出し、快楽の世界へ、言いかえるならば、至上の美を追い求めようとしているのである。

そこに常に現われ、若者の監視役をするのがブラックネル卿夫人の存在である。彼女は、この社会を支配している。特に結婚に関しては、若者たちにとって、ブラックネル卿夫人は、大きなハードルであり、彼女の承諾を得なくてはいけない。

When you do become engaged to some one, I, or your father, should his health permit him, will inform you of the fact. An engagement should come on a young girl as a surprise, pleasant or unpleasant, as the case may be. It is hardly a matter that she could be allowed to arrange for herself. (197)

ブラックネル卿夫人は、グウェンドレンの花婿候補者名簿を作っており、ジャックが彼女の求める花婿像かどうか、ジャックに質問していく。両親は健在かどうかの質問にジャックは“I have lost both my parents.”と答え、ブラックネル卿夫人は“Both?... That seems like carelessness.”(203)と言い、ジャックの出生の秘密を理由に、二人の婚約は認めようとしぬ。ジャックは不満を顕わにし、ブラックネル卿夫人のことを‘Gorgon’や‘Monster’と呼ぶ。

一方、アルジャンンの方は、こっそりとジャックがグウェンドレンに田舎の住所を教えているのを聞き、田舎にいるセシリーという女性に会うために、彼自身が、ジャックの作り上げた弟アーネストになり、田舎に出かける計画をたてる。アルジャンンは、ジャックが用いた「アーネスト」を、そのまま同じ目的に使うのである。ジャックは田舎からぬけ出してグウェンドレンに会うため、アルジャンンは田舎にいるセシリーに会うために、「アーネスト」を使っている。「アーネスト」は二人にとって快楽を求めるための手段であった。

ここで、「アーネスト」の言葉の逆説が生じる。ジャックの作り上げた弟は、不良であるのだが「アーネスト」(真面目)という名前であり、二人は快楽を求めるために「アーネスト」(真面目)という名を利用している。世間の常識では逆説のように感じるが、彼らは、俗物によって作り上げられた道徳に反抗し、自ら美を追求し、そこに歓びを感じるところに人間的な欲望が存在していると考えるのである。彼らにとってこれが本当の意味での「アーネスト」ではないだろうか。即ち、快楽＝美を殺すことは、偽善者なのである。

しかし、ジャックはグウェンドレンに会い結婚することが目的であり、彼女と結婚したら「アーネスト」は殺すつもりだとアルジャンンに述べ、彼もバンベリーと縁を切るように忠告すると、アルジャンンは次のように答える。

Nothing will induce me to part with Bunbury, and if you ever get married, which seems to me extremely problematic, you will be very glad to know Bunbury. A man who marries without knowing Bunbury has a very tedious time of it. (182)

ここで、二人の結婚観の差異が感じられる。ジャックにとって「アーネスト」は独身の時だけにゆるされるものであり、結婚後はいわゆる「理想の夫」になるものと考えている。ジャックは、ある意味では世間のモラルに支配されていると言える。反対に、アルジャンンは、結婚後も二重生活を貫き、自分の信じる生活を守りつづけようとする。ジャックの、結婚観には限界を感じるも

の、求婚までは、二人の求める「アーネスト」には共通したところがあるといえる。

### III

次に、女性登場人物を見てみよう。彼女たちには、男性が思い描く女性像とは相反する姿が浮び上がる。都会にいるグウェンドレンと、田舎に住んでいるセシリーには、いくつかの共通点がある。まず、彼女たちは二人とも、「アーネスト」という名前に執拗なまでにこだわっていることがあげられる。グウェンドレンは、ジャックとの対話の中で次のように述べている。

…and my idea has always been to love some one of the name of Ernest. There is something in that name that inspires absolute confidence. The moment Algernon first mentioned to me that he had a friend called Ernest, I knew I was destined to love you. (191-192)

グウェンドレンは、「アーネスト」という名前の人を愛するのが理想であり、ジャックと出会う前から、運命を感じていたと言う。それを聞いたジャックは、自分がもし仮に、別の名前、例えばジャックだったらどうかと聞いたら、彼女はやはり信頼がおけ、安心ができるのは、「アーネスト」のみだといっこうに引こうとしない。グウェンドレンは、「アーネスト」という名前に対し、高い理想像をふくらませ、人間性は後からついてくるものであって、「アーネスト」を表面的にしかとらえていないことがわかる。セシリーも「アーネスト」に対して、同様の意見をもっている。“…it had always been a girlish dream of mine to love some one whose name was Ernest.” (261-262) セシリーの夢もまた「アーネスト」という名前の人を愛することであって、「アーネスト」に対して絶対の信頼感を持っている。二人とも、自分の中で「アーネスト」という気高い理想の人物像をつくり上げ、それに、あとから現実をあてはめている。彼女らは、空想の世界を広げ、その中で現実のはざままで生き、いわゆる女性的であるといわれる性質をそなえているように見える。さらに、セシリーはまだ出会いもしていないジャックの弟「アーネスト」との恋愛を自分の中で空想し、婚約から、指輪の交換、婚約解消、そして又婚約まで、ことごとく日記や手紙に書きつづっている。それを聞いたアルジャノンも、さすがに驚いてしまう。

Declan Kiberdは、このようなセシリーの一見女性的な性質を次のように分析する。

In *The Importance of Being Ernest* his heroine Cecily rejects the notion of an antithesis between herself and others, because she has already recognised the antithesis within herself. So, though doomed to tedious isolation under the grim, all-female regime of Miss Prism, she expresses the male element in herself by conducting an imaginary love affair and sending letters to a lover who exists only in her own head. (Kiberd 27)

Kiberdは、ワイルドが善悪をはっきり分けてしまう二項対立を否定する作家であると述べた上で、ワイルドの作品中の女性にも、彼の思想が反映されていることを指摘する。セシリーは、都心から離れた田舎で厳しい家庭教師に監視され生活しており、彼女の境遇は、18、19世紀の典型的な抑圧された女性のそれと見える。そのような抑圧は批判されるべきであるが、彼女に悲壮感は感じられない。ワイルドは、彼女を取るに足らないことにこだわったり、空想の世界に浸

りきったりする女性的な性格に描く一方で、同時に、全く異なった男性的な性格も持ち合わせていることを示しているからではないか。

グウェンドレンも、男性に対し、新しい見解を抱いていることを示している。グウェンドレンはジャックを追って田舎に来て初めてセシリーに会い、セシリーの名前を聞いたとたんにセシリーのことを気に入り、自己紹介をしはじめる場面で、彼女は父親のことを次のように説明する。

Outside the family circle, papa, I am glad to say, is entirely unknown. I think that is quite as it should be. The home seems to me to be the proper sphere for the man. And certainly once a man begins to neglect his domestic duties he becomes painfully effeminate, does he not? And I don't like that. It makes men so very attractive. (267)

本来、女性の領分だとされていた家庭や家事をグウェンドレンは男性の本領だとし、彼女は、男性の最も魅力的な部分を弱さと説いている。グウェンドレンの男性に対する見方は全く新しいものであるといえる。

グウェンドレンの母親であるブラックネル卿夫人の結婚観は、娘とは全く反対のものである。グウェンドレンは、『ウィングミア卿夫人の扇』(*Lady Windermere's Fan*, 1892) のアガサのように、母に従順で、自我を持たない女性ではないが、結婚となると、母、ブラックネル卿夫人に従わなければならない。グウェンドレンとジャックが婚約を済ませた後、ブラックネル卿夫人に報告すると、彼女は自分を介さない結婚は認めないと言い、ジャックに質問をするために、娘を下の車へ追いやる。ブラックネル卿夫人は明らかに、社会的地位や財産が結婚する必要条件と考えている。ブラックネル卿夫人は、はじめはあまりのりきでなかったアルジャンンとセシリーの結婚も、セシリーが財産を持っているとわかったとたん手のひらをかえたように態度を変える。そして、アルジャンンが、借金ばかりだということに対しては、“But I do not approve of mercenary marriages.” (308) と矛盾したことを言う。ブラックネル卿夫人はこの社会を支配しており、まさしく、権力、特権の恐るべきシンボル (Knox 100) と言うことができる。ワイルドは、ブラックネル卿夫人を使うことによって逆説的に、階級の違う結婚に向ける世間の冷たい目や、人間性より財産を重視する結婚に対して、厳しい批判の目を向けているのである。

#### IV

さて、この劇の主なテーマは結婚であるが、男性が女性に求婚するに至って、今まで見てきた「アーネスト」の意味あいは、どのように変化を遂げるのであろうか。男性が女性に求婚する時、ダンディーたちはすっかり女性のペースにはまっている。まず、アルジャンンとブラックネル卿夫人が音楽室へ行ってしまった時、ジャックがグウェンドレンに求婚するチャンスをつかむ。

Jack(nervously): Miss Fairfax, ever since I met you I have admired you more than any girl... I have ever met since... I met you.

Gwendolen: Yes, I am quite aware of the fact. And I often wish that in public, at any rate, you had been more demonstrative. For me you have always had an irresistible fascination. Even before I met you I was

far from indifferent to you. (191)

やっとのことで告白する機会を手に入れ、緊張しながら、グウェンドレンに愛を打ち明けたジャックは、彼女の予想外の答に、嬉しさ半分びっくりしてしまう。このやりとりは、ちょうど『理想の夫』(*An Ideal Husband*, 1895) のダンディーのゴーリング子爵と女性版ダンディー、メイベルの求婚場面に似ている。今まで、才機あふれる会話で人々を魅了していたダンディーは、この求婚にいたっては、女性に圧倒されている。ジャックは、「アーネスト」という名前の問題は残っているにしろ、ひとまず、自分の気持ちを伝え、良い返事を貰ったので、ほっとしていると、彼女は、“But you haven't proposed to me yet.” (194) と言い、形式をふむようにジャックに指示する。ジャックが、今求婚してもかまわないかどうか聞くと、彼女は、次のように答える。

I think it would be an admirable opportunity. And to spare you any possible disappointment, Mr. Worthing, I think it only fair to tell you quite frankly beforehand that I am fully determined to accept you. (195)

求婚する前から、返事をもらいそして改めて求婚する普通の段取りと違う状況にジャックはとまどい、グウェンドレンに言われるままに行動しているのがわかる。

アルジャンノがセシリーに求婚する時も同様である。彼はセシリーに会うために、「アーネスト」という名前の架空の人物になりすまし田舎へやってくるが、セシリーに会ったとたん彼女を気に入ってしまう。そして求婚へ至るのである。

Algernon: I love you, Cecily. You will marry me, won't you?

Cecily: You silly boy! Of course. Why, we have been engaged for the last three months. (257)

セシリーの思いがけない返事に、アルジャンノは戸惑いを隠せない。彼は、彼女と会う前から、婚約が成立していたとは思ってもみなかった。この二組のカップルをみてわかるように、すべて女性が、前もって何でも決めている。当時は、男性側が、すべて決めてしまい、女性は、求婚をされるのを待ち、男性に従順に従うのが通常とされていた。この当時の社会通念から見ると、二人の女性は当時の女性像と全く違ったタイプの女性にうつる。ワイルドは、この二組のカップルの求婚を通して、男性主導型の結婚形式を批判しているのだ。そして、それとともに女性が、男性を思い通りに指揮し、翻弄する様子を描くことによって、観客に笑いをもたらすと同時に、自らも女性側に立ち男性を嘲笑っていたように思われる。

第二幕の最初で、アルジャンノがセシリーに初めて出会う場面でも、彼が彼女に翻弄される様子が描かれている。アルジャンノは、セシリーに会うために、不良の「アーネスト」になり、田舎へ出かけるが、セシリーに「あなたが不良の従兄のアーネストさんね」と言われると、アルジャンノは否定する。彼は、不良と見せかけて実は善良だということにし、彼女の心をつかもうとするが、彼女にそれでは偽善だと言われると、手のひらをかえたように、自分をかかなりの悪に仕立て上げる。ここでは、全くアルジャンノの意志というものが見られず、常に彼女の思いのままに次から次へと自分をつくり変えている。つまり、彼のアイデンティティーは見失われているように思えるのである。

このように、二人の男性は、愛する女性に会い、求婚するに至って、自らの主義主張を変えら

ざるを得なくなっていくのがわかる。そして、同時に彼らの使っていた「アーネスト」の意味あいも変化を遂げていく。初め、ジャックは「真面目」から逃避するために「アーネスト」という仮面をかぶり、田舎と都会の二重生活をする。アルジャノンもまた同様な生活を送っているが、この時点での「アーネスト」は、真面目からの逃避という逆説的な意味あいが含まれる。それに対して、グェンドレンとセシリーは、「アーネスト」を理想化し、絶対の信頼をおき、「アーネスト」という名前の人物との結婚を望むという時点では、「アーネスト」を表層的にしかとらえていない。

男性たちは、彼女らと接するうちに、彼らの思う方向に物事が進んでいかないのを感じる。彼女たちの「アーネスト」に対する固執に、彼らは戸惑い、自分たちが「アーネスト」でなければならぬ必要性が出てくる。男性たちは、改名まで考えるが、ここまで来ると、彼らのアイデンティティは、女性たちによって次々に変えられ、初め彼らの使っていた「アーネスト」の意味は、すっかり消え、表層的になってしまったのである。彼らは女性の求める「アーネスト」という理想像に追いやられたのであるが、これは偽善にしかすぎない。こうして理想化された「アーネスト」だけが宙に浮き、ここでの「アーネスト」は、彼らのアイデンティティの喪失、偽善を意味しているようにも思われるのである。

## V

第三幕で、ジャックは、ブラックネル卿夫人の姉の息子であったことが明らかになり、プリズム女史が、間違えて乳母車に彼女の長編小説の原稿を、かばんの中にジャックを入れ、駅の手荷物一時預かり所に預けてしまった事が分かってくる。また、この幕で、ジャックのアイデンティティのかぎを握る人物、ブラックネル卿夫人が再び登場する。プリズム女史との一連のやりとりで、徐々にジャックの出生の秘密が明らかにされていくが、アイデンティティを喪失したジャックは、ついにブラックネル卿夫人に“… would you kindly inform me who I am?” (323) と自分の正体はいったい何であるかを尋ねる。最終的に、ジャックは、アルジャノンの兄であることが判明するが、この過程において、ジャックの態度が次から次へと変化していることがわかる。ジャックは、プリズム女史のことを自分の未婚の母だと思ひこみ、彼女に同情するとともに、彼女の過去の過ちに対し許容の心を持ったかと思えば、アルジャノンが弟だとわかると、急に、不良の弟をもつ善良の兄になるのである。そして、ジャックの本当の名前が「アーネスト」だとわかると、彼は最後に、“I’ve now realized for the first time in my life the vital importance of Being Earnest.” (329) と言う。文字通り、ジャックは、「真面目」であることの大切さを悟ったのである。この劇が、ウェルメイドプレイであることを示す結末である。しかし、この劇において、常に逆説が根底にあり、ワイルドは、ジャックに「アーネスト」と言わせて、また「真面目」とは別のことも同時に示唆しているのである。Knoxは次のように指摘する。

But he wanted to laugh at the idea that he had to choose one identity or role in order to do so, to show how unimportant it really was whether he, the double of Jack, was earnest or not. He wanted to negate the importance of social status… (Knox 106)

ワイルドは人間の多様性について説いており、画一的に人間を理解する人々や、単純に白黒別けてしまう態度に批判の目を向けている。又、ジャックが身元不祥である時、グェンドレンとの結婚を認められなかったことなどを示すことによって、階級の違いによる結婚を受け入れない偏狭な社会にも、嫌悪を示している。さらにKiberdは当時の社会の特質を次のように分析する。

At the roof of his paradoxes is a scorn for the absolute Victorian distinction between male and female, which he sought to combat in his critical writings no less than in his art. (Kiberd 28-29)

ワイルドは、全ての物事を画一的に別けてしまう態度はヴィクトリア朝社会の特徴だとし、男女においても役割分担をしたり、男性女性それぞれあるべき姿を決めつけ、おしつける態度にも、鋭い批判の矢を投げかけているのである。このように見てみると、「アーネスト」に、様々な思いを託しているワイルドにとって、「アーネスト」とは、ヴィクトリア朝社会の社会通念に対する鋭い批判とともに、人間性の多様性、柔軟性を意味しているのである。

\* 本稿は、日本英文学会中部支部第50回大会（1998年10月24日、名古屋大学）で口頭発表した原稿を加筆修正したものである。

#### 注

George Bernard Shawが*Saturday Review* (23 Feb. 1895) で*The Importance of Being Earnest*はこっけいだがcomedy of mannersとして受け入れられないとし、鋭く批判している。

#### 引用文献

- Beckson, Karl, ed.. *Oscar Wilde*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.  
Hart-Davis, Rupert, ed.. *Selected Letters of Oscar Wilde*. Oxford: Oxford University Press, 1979.  
Kiberd, Declan. *Men and Feminism in Modern Literature*. London and Basingstoke: Macmillan, 1985.  
Knox, Melissa. *Oscar Wilde*. New Haven and London: Yale University Press, 1994.  
Powell, Kerry. *Oscar Wilde and the Theatre of the 1890s*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.  
Tydeman, William, ed.. *Wilde*. London: Macmillan, 1982.  
Wilde, Oscar. *The Works of Oscar Wilde vol. 5*. New York: AMS Press, 1980.  
Worth, Katharine. *Oscar Wilde*. London: Macmillan, 1983.  
山田勝編. 『オスカーワイルド事典 -イギリス世紀末大百科-』. 北星堂書店, 1997.